

堀越先生に贈る言葉

福井憲彦

鉢の水遣りをすませて机に向かう部屋に、かすかに金木犀の香りが忍び寄ってくる。鉢もののクリスマス・ローズには、淡い緑の新芽が立ち上ってきていた。また秋がめぐってきたか、と、そんな思いで窓の向こうの雲に目を走らせ、想を練る。

堀越さんがもう定年なんて信じられないな。この一年ほどのあいだに、そんな会話がどれだけ繰り返されたことだろうか。堀越孝一先生ご退職の機に一文をものするのは、私にとってはまことに栄誉なこと。しかしどうやって書き出したものか、悩んだ。この栄誉や悩みの感覚が私に迫ってきたのは、ほかならない、堀越先生が文章家であられるから。そう書けば、大方の人には得心がいくだろう。

歴史の研究者は世に多い。私もその端くれにひっかかっている。歴史の本を世に問うている人も、また少なくない。私はこの点でも、その端くれに並んできた。しかし、である。みずからのスタイルを我がものにしている人は多くはない。研究者としては人後に落ちないと自負している私でも、人から歴史家といわれると、背中がくすぐったい思いをする。しかし堀越先生は、おそらく歴史家という表

現がびったりおさまる風格である。

ここでスタイルというのは、なにより文体のこと。先生のご本を読めば、もう堀越節としか言いようのない、独特のリズムをもった文字の世界がわれわれを待っている。正直言って、はじめのうち私は戸惑うこともあった。行間に何が詰まっているのか、われわれが読むときには、並べられた文字の向こう側にまで想いをはせる。堀越ワールドに詰まっているものに馴染むのは、そんなに容易いことではないのだ。余人をもっては替えがたい、という言い方がある。

堀越先生の文体ばかりは、とても真似すらできない独自世界である。私ら凡人の言葉ではうまく譬えられない。

この独自のスタイルは、先生の話し方にもまた妥当する。先生の講義や演習での話し振りもそのようで、どっぷり堀越ワールドに引き込まれた学生諸君は、なにか身動きできないような快感に浸っているらしい。翻って言うところ、うまく馴染めない人には、堀越先生が何をおっしゃりたいのか、なかなかその真意がつかめない。そうこぼす人にも出会う。私にはどうだろうか。先生のこの真似しがたい

スタイルは、私の不躰なまでの直截さとはおよそ対極にあるように見えるが、しかしスタイルの奥にある先生の感覚世界はよく分かる気がしてきた。この十五年来、学習院大学の史学科と史学会という共通の場で濃密にお付き合いさせていただくなかで、いや誤解の効用もあるねえ、そう簡単に分かるものでもない、という堀越先生のクックツという笑い顔も目には浮かぶが。

スタイルの三。それは語ることもそのうちに含めて、ものごとを論ず教育のスタイル。先生はご自分についての物語を、ごくごく自然のうちに目の前にひろげ、凡人であればこれ見よがしにもなるうかという話でも、なにか空気が流れてくるようにさらっと、取り巻くもののなかに流し込んで魅了する。とても並では及ばない。

こうして書いてくると、ほとんど変化球しか投げない、老獪な、なかなかつかみがない師匠のような像が浮かんでくるかもしれない。じっさい先生の辞書には、直球はないのではないか。人生はね、歴史もね、けっして一筋縄なんかではないのかなのだよ、と。私も納得の姿勢をとる。しかし、である。堀越先生の若いころの仕事からは、じつは相当強烈な直球というか、パチーンと正面から相手に挑む、「畏れしらずのジャン」のようなこわもての姿も浮かんでいる。先生の仕事をきちんと読んでいる人には分かるだろう。あの「中世ナチュラリズムの問題」、『パリー市民の日記』といわれてきた、中世末パリの社会や政治をうかがわせる貴重な史料の読みについて、大御所の大先生に真正面から切り込む姿は、これは惚れ惚れする以外にない。まあ、うるさい若者が出てきた、と嫌われたとしてもむべなるかなだが、これこそ学問ではないか。そう、歴史的な読みにこ

だわる姿勢を、堀越先生は若いころからストレートに示しておられた。しかも剛速球である。

テクストの読みに始まり、読みの姿勢にこだわり続ける。たとえばこう読める。「一五世紀フランスにおける王権の状況を、完了形においてではなく現在形において理解したい」。これは、堀越先生が『ジャンヌ・ダルク』のあとがきで、さらっと書いておいでのところ。中世世界についての読みには、しばしば近代の思い込みが忍び込んでいる。先生は、そう警鐘を鳴らしつづけ、ジャンヌを通じて、あるいはまた、なにより『遺言詩』のヴィヨンを通じて、中世を中世に帰すことを試み続けてこられた。私のような下端が天晴れなどというのはおこがましいが、ついそう言いたくなるほど、一貫して。「あいつも遊って、三十年」というわけではない。まだまだ、放浪の旅は豊かな眺めを道の先に用意しているらしい。そう、「権兵衛」を通じて中世のパリをわれわれにひもといてくださる仕事は、もうあらかじめ形を成しておられるという。この忙しい日々の反復にあって、いったいいつのまに。

書き出しが、あえて花木と自然のことになったのは、もちろん堀越先生と、そして節子夫人のお顔が、目の前を去来するからのこと。なにを言っているのかって。分からない人は、先生のエッセー集『軍旗はブラシユの花印』をお読みなさい。これ、堀越節による本の薦め方です。たとえ史学科からお退きになるからといって、先生を送る言葉とは書きたくない。歴史学の同志としては、まだまだこれからも、なのです。ですから贈るのです、言葉は。